



| | |
|--------------|---|
| Title | Folk traditions as a key to the understanding of music cultures of Java and Bali |
| Author(s) | Franciscus, Xaverius Suhardjo Parto |
| Citation | 大阪大学, 1991, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/37341 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・（本籍）

フランシスコス サベリウス スハルジョ パルト
 FRANCISCUS XAVERIUS SUHARDJO PARTO

学位の種類 文 学 博 士

学位記番号 第 9 4 5 3 号

学位授与の日付 平 成 3 年 1 月 14 日

学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 Folk traditions as a key to the understanding
 of music cultures of Java and Bali
 （ジャワ及びバリの音楽文化理解の鍵としての民俗伝統）

論文審査委員 (主査)
 教 授 谷 村 晃
 (副査)
 教 授 山 崎 正 和 助教授 山 口 修

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ジャワ及びバリの優れた伝統芸術であるガムラン音楽及び影絵芝居が、祖霊信仰の民俗伝統を基盤としながら、仏教、ヒンドゥー教、イスラーム教と混淆する過程を、中部ジャワのバンユマス（Banyumas）に伝わるダラン・ジュンブルン（dalang jemblung）の分析を通じて解明しようとする民族音楽学的研究である。全体は、第1部「導入部」、第2部「二つの民俗伝承—ジャワ及びバリの影絵芝居」、第3部「バンユマスのダラン・ジュンブルンの分析」、第4部「結論」の四部から構成されている。本文は英語で、論文内容の要旨は英語、インドネシア語及び日本語で書かれている。

第1部、第1章「ジャワ及びバリの音楽文化伝統の同根性」では、まずインドネシアの伝統芸術におけるジャワ及びバリの音楽文化形成の過程が大文明と小文明の観点から巨視的に概観される。シャーマニズム、仏教、ヒンドゥー教、イスラーム教と不可分に結びついたインドネシアの音楽文化伝統について述べた上で、ジャワ及びバリの音楽文化伝統の同根性が主張される。次に西暦5世紀頃のジャワのカリンガ朝誕生後に見られるジャワの音楽及び上演芸術の伝統固執の問題が取り上げられる。この伝統主義は1) 古代のインドネシア・マレー文化の伝統、2) 古代アジア文化の伝統、3) インドの文化伝統の三つの流れの出会いにより展開された。このような伝統主義が、ジャワ及びバリの人々のなかに文化の持久性（durability）を育成した。影絵芝居の使い手、ダラン（dalang）はこうした文化の持久性維持に主要な役割を果たしてきた。15世紀以後に伝えられたイスラーム教は、この持久的基層文化に、その融合性によって対応した。このような問題提起に続いて、本論文の研究対象と研究方法が説明される。インドネシアの伝統音楽の歴史に関する研究、特にジャワの小文明に関する論考や論文が少ないので、今日の民俗伝統を扱った緻密な比較研究の必要性が強調される。ここでは民俗伝統をジャワ及びバリ音楽文化理解

の鍵と見る仮説的方法を用いて、インドネシアの伝統音楽の歴史的解釈のための学術的基礎の提供が意図される。第2章「中部ジャワの文化伝統におけるガムラン及びワヤンの誕生」では、インドネシアの様々な民俗芸能の歴史が、潜在的な宗教間の抗争、祖霊信仰と一神教との確執によって特徴づけられるとする仮説が述べられ、インドネシアの音楽学研究がこの関連で今後果たすべき役割のなかでのこの仮説の重要性が強調される。さらにここではインドネシアの歴史におけるアジア各地からの民族移動の波と、その中部ジャワのディエン高原（Dieng plateau）への定着、そしてそこでの古代ジャワの伝統的民族芸術としてのワヤンの誕生について論じられる。

第2部、第3章「ワヤンの二つの民俗伝統、ジャワとバリ」では、西南インドネシア（西はスマトラ島南部から東はロンボク島までを指す）の一つの大きなゴン・チャイム文化圏（gong-chime culture）内に属するジャワとバリの二つの地域文化の歴史においては、民俗伝統が宮廷文化伝統に先行する傾向にあったこと、中部ジャワのカリンガ朝が西暦紀元5世紀に最初の王朝として誕生する以前に、ジャワ及びバリではワヤンの民俗伝統が既にかかなり長い期間にわたって存在していたことは確かであること、この民俗伝統は根源的にシャーマニズムと結びつくが、そこでは祖霊や神々との交信に憑依儀礼を用いたことが述べられる。バリのワヤン・ルマー（wayang lemah）は、そのことを示す確かな例である。ワヤン・ルマーが一つの楽器、即ちグンデル（gendèr）しが用いないにせよ、ゴン（gong）、クンダン（kendang）、クチレ（kecerèk）といった楽器を用いるシャーマニズムの伝統は古代のジャワ及びバリにはなお支配的であったものとされる。

第4章「中部ジャワのダラン・ジュンブルン」では、ジャワの民俗伝統の一つとしてのワヤン・ジュンブルンないしはダラン・ジュンブルンが取り上げられる。ダラン・ジュンブルンはジャワでは広く知られているが、それは中部ジャワの南部のみならず、それと同一線上にある東ジャワ南部の二ヶ所にも見られる。大部分のダラン・ジュンブルンはイスラーム教の考え方によって支配されている。源泉が同じである点で、ペルシアの＜アミール・ハムザ（Amir Hamzah）＞の物語とロンボク島のワヤン・ササ（wayang sasak）とがイスラーム教に関する共通の情報源としてここに取り上げられる。ダラン・ジュンブルンとワヤン・ササとの間には、そのプロットの構成において密接な関係が見られる。恐らくワヤン・ササのプロットはロンボク島へのイスラーム教布教の際にジャワから持ち込まれたものであろう。

第5章「バリのワヤン・ササ」ではバリの伝統文化としてのワヤン・ササがバリ島東南部の町、カランガセムにしか見られないという不思議な現象について論じられる。第二次世界大戦以前は、カランガセムのワヤン・ササはカランガセム王宮の庇護のもとにあり、その上演権はカランガセムのバラモン階級の僧侶達の手に握られていた。そこで使用される言語は古ジャワ語（Bahasa Kawi）、ササ語、バリ語であった。しかし20世紀初期以来のバリ島への外国からの観光客の流れに影響されて、カランガセムのワヤン・ササはすっかり主流から外れてしまった。

第6章「二つの民俗伝統の比較：持久性と融合性」では、ジャワ及びバリの人々の文化的、宗教的背景が論じられる。ジャワとバリのワヤン・クリの伝統は、歴史的にはその起源を一つにしている。ジャワ及びバリのワヤン・クリのプロットの構成を理解するためには、いずれのワヤン・クリも根本的に宗教的特質を持つものであることを知らなければならない。またジャワ語とバリ語の詳細な比較研究から、この二

つの言語が本来同一の母語から分かれたものであることが明かとなる。本論文でシナリオのテキストが詳細に翻訳、分析されるのもこのためである。ジャワ及びバリの庶民の文化的宗教的背景に関する研究を通して、われわれはジャワ及びバリの音楽に多くの共通点を見つけることができる。

第3部、第7章「ダラン・ジュンブルンの二つのシナリオ」では、地域文化の一つとしてのワヤンが、歴史的な文脈のなかでジャワ全土、マドゥラ島、バリ島、ロンボク島、パレンバン、カリマンタン南部、さらにはカリマンタン東部にまで見出されることが論述される。過去においては、ヒンドゥー・ジャワ教寺院の祭に奉納されるワヤンの上演時間は、今日のそれよりもはるかに短かった。バニユマスのワヤン・ジュンブルンに〈ムスタカウェニ (Mustakaweni)〉のシナリオを持ったものがないのは、その上演に約4時間を要することが主たる原因である。〈ムスタカウェニ〉のシナリオは、以前にはその起源がイスラーム教徒の町、デマ (Demak) にあるとされていたが、今日ではそれはスラカルタ (Surakarta) のワヤンの伝統が間接的にバニユマスに伝えられたものであることが分かっている。今日のジュンブルン上演の様式はイスラームの町、バニユマスのワヤン上演の様式であるといえる。

第8章「シナリオ〈ムスタカウェニ〉の翻訳」では、上演芸術としてのワヤンのシナリオに関する基本的分析が行われる。この分析の目的は、1) 本質をめぐる多面的なアプローチの導入、2) より良い理解のための比較研究の試み、3) 効果的にダランの語りを追うこと、4) ダランの言葉ないしは語りの意味の理解等にある。ここで使用される方法は帰納的方法である。この方法による分析結果は、次章での詳細な分析にとっての有効な基礎を提供するものである。

第9章「〈ムスタカウェニ〉の分析」では、〈ムスタカウェニ〉の内容の分析が行われる。この分析の目的は、ワヤンの伝統文化の枠組みのなかにおける〈ムスタカウェニ〉物語の位置を見極めることにある。即ち〈ムスタカウェニ〉は神話なのか、ジャワの民俗伝承なのか、或いは中部ジャワのワヤンの一ジャンルなのか。この分析の目的は、またワヤン・クリ理解のためのいくつかの問題点に即してジュンブルン上演の実際を観察することにある。分析の方法は帰納法である。この分析の結果はわれわれにバニユマスのジュンブルンに関する総合的な視野を提供してくれるであろう。

第4部、第10章「併存する文化の持久性と融合性」では、文化の持久性ないしは受容性と融合性が論じられる。文化の融合は何度か起こった。即ち、1) 西南インドネシアの地域文化と、その起源を中央アジアのシャーマニズム伝統のうちに持つ東南アジア大陸部の伝統文化との間の融合、2) 上記1) と古代におけるアジア (中国) からの移住民の文化の流れとの融合、3) 上記の1)、2) の融合の結果と西南インドネシア地域にきたインド人によってもたらされた文化との融合 (それはヒンドゥー教に基づいたジャワの王朝、即ち中部ジャワのカリンガ王朝を西暦紀元5世紀に誕生させることとなるが、この第三の文化融合はボロブドゥール以前の時代に中部ジャワにその活動の中心を持っていた)、4) ボロブドゥール寺院建造後の時期に起こった文化融合、5) ジャワ東部の文化伝統のなかでのヒンドゥー教及び仏教のジャワ化としての融合、6) 恐らくインド経由でペルシアからもたらされたイスラーム文化と西南インドネシアの既存文化との間の融合 (この融合は紀元15世紀以後に起こった)。これらの文化融合については、それぞれ具体的な例を挙げて論述される。

例として挙げられているものは、古代ビルマから導入されたゴンの一種、モ (mo) の製作と青銅鑄造

技術、モ製作の鋳型と見なされるボナン形の石の発掘、祖霊信仰におけるシャーマニズムと結びつくシェン (sheng) (中国の笙)、クプラ (keprak) (割れ目太鼓)、引っかく楽器 (garuk)、オカリーナ
その他様々な楽器の到来、ゲロンガン (gérongan) (男声斉唱)、パヌンブロモ (panembromo) (ジャワの混声斉唱)、パニユンブロモ (panyembromo) (バリの伝統的な斉唱)に見られるジャワの
伝統音楽への仏教歌唱の導入、マジャパイト (Majapahit) 時代に頂点に達する仏教及びヒンドゥー教
のジャワ化、その例としての東部ジャワのシヴァ・仏教寺院でクルタヌガラ (Kretanegara) 王を祀る
チャンディ・ジャウィ (candi Jawi)、東部ジャワの町、マラン (Malang) 近郊のヒンドゥー教・
仏教混淆のモニュメントとなった建造物であるバイラワ (Bhairawa) を祀るシンガサリ寺院 (candi
Singasari)、ジョクジャカルタのスルタンのメッカ巡礼の実態、天上の踊りとしてのブドヨ・クタワ
ン (Bedoyo ketawang) の定期的な上演、ラスラン (rasulan) と呼ばれる民俗宗教的伝統、年三
回のイスラーム・ジャワ王室の公式儀礼、ガルベック (garebeg) 終了後の夜にそれと連動して上演さ
れるワヤン・クリ等々である。ガムラン音楽をもそのなかに含んだ一つの伝統としてのワヤン・クリの文
化的持久性は、特に根底にある宗教的信仰心、ないしはシャーマニズムとジャワの他の様々な宗教との融
合、合成を図ろうとする努力によって引き起こされてきたものであることが論述される。

第11章「音楽文化理解の鍵としての民俗伝統」では西南インドネシアにおける音楽文化理解の鍵とし
ての民俗伝統に焦点が当てられる。この地域の中では、古代中央アジア及び古代東アジアからの文化の流
れに起源を持つ最初の小文明の中心地域となったのは、中部ジャワ北部に拠点を持ったジャワ島であった。
バリ島もまた、中央アジア及び東アジアの音楽伝統に関して、同じような強い地位を保っていたので、既
に拡大されつつあったジャワの小文明の第二の中心地となったものと考えられる。古代バリにおける音楽
伝統は、明らかに<パロン>を伴う民俗的上演芸術の伝統の上に基礎づけられていた。バリ島中部のワト
ゥカル山の斜面でバリ暦の6ヶ月毎に举行されるヒンドゥー教の祭、オダラン (odalan) は、古代バリ
の音楽文化理解の鍵となり得るものと解釈できる。その理解に必要な要素は、1) 聖なる寺院の祭の進行
のクライマックスにおいて、夜、境内の内陣で行われる奉納の踊り、ペンデ (pèndet) の果たす役割、
2) この祭に招かれた神々への奉納としてのガムランの曲、3) 一組のガムランの楽器としてのゴン・ル
ワン (gong luwang) の起源の推定である。もしもバリのルジャン (rejang) がタイのリヤン

(Ryang) と歴史的な関連があるとするならば、ゴン・チャイムないしはブンチョン (pencon) 楽器を
伴うバリの音楽は明らかに古代マレー・インドネシア人の居住地であったアジア大陸にその起源を持つは
ずである (Beals; Hoiyer 1959:182)。今日まで、殆ど誰一人として<ウダン・マス (Udan
mas)>という曲 (gending) の聖なる意味を理解していない。この曲は、以前にはヒンドゥー教寺院
(candi) (バリ語では pura と言う) の祖霊信仰儀礼としての祭に関連して演奏されたもので、それは
西暦紀元9世紀の中部ジャワにおけるヒンドゥー教復興の時代のバリトゥン王 (Raja Balitung) の
墓廟であったと思われるシヴァ神を祭る寺院で演奏された曲である。元来ロンボク島の西部にもたらされ
たカランガセムのワヤン・ササは、ロンボク島でのイスラーム教布教と結びついた民俗伝統である。

最後に、全11章の内容から帰納される様々な仮説が、75項目に整理されて、本論文の課題、「ジャ
ワ及びバリの音楽文化理解の鍵としての民俗伝統」についての結論とされている。

以上の本文は226頁であるが、他に地図（7葉）、英語、インドネシア語、日本語による内容の要旨（18頁）、緒言（3頁）が巻頭に、文献表（23頁）、補遺（7頁）、用語解説（26頁）が巻末に添えられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、長年にわたる現地調査の結果に基づいてジャワ及びバリの伝統文化としてのガムランと影絵芝居の成立過程を、民俗伝統の面から解明しようとした民族音楽的研究である。その中心は、祖霊信仰、仏教、ヒンドゥー教、イスラーム教の混淆する複雑なインドネシア社会の脈絡に組み込まれた伝統芸術の意味を、中部ジャワのバニユマスに伝わるダラン・ジュンブルンの分析を通して具体的に明らかにしようとする意欲的研究である。その視野の広さ、未発表の資料の駆使、資料解釈の独創性、事例に即した綿密で具体的な分析は、インドネシア人自身によるインドネシアの音楽学研究の優れたモデルとして高く評価できる。

評価すべき第1の点は、論文内容の要旨からも分かるように、ジャワ及びバリの音楽文化をめぐる知識の豊富さである。その知識はインドネシア以外の先学の研究から得たもの、インドネシア人による研究から得たもの及び筆者自身がフィールドワークを通して獲得したものがある。これらの知識は、いずれもインドネシアの宗教、言語、文学、芸能、生活と結びついた複雑な脈絡を解きほぐすのに役立つもので、外国人の研究者にとって利用価値の高い情報源であるのみならず、インドネシア人自身にとっても今後の民族音楽学研究の重要な手がかりとなるものである。第2部、なかでも第6章「二つの民俗伝統の比較：持久性と融合性」にはジャワ及びバリの民俗伝統に関する具体的に詳細な記述が多い。また古ジャワ語、ジャワ語、バリ語等からなる専門用語を中心に作成された巻末の用語解説も関係者にとって利用価値が大きい。

評価すべき第2の点は、第3部で扱われるバニユマスのダラン・ジュンブルンの詳細な分析である。ダラン・ジュンブルン、なかんずくそのシナリオ〈ムスタカウェニ〉が、ジャワとバリの二つの民俗伝承の関連を解く鍵としてあらゆる角度から分析され、また詳細な注をつけ英訳されている。このシナリオとその音楽の分析は、今回初めて公表されるもので、その資料的価値は極めて高い。またこの分析によってジャワの影絵芝居がイスラーム教化されていく過程、そのなかでなお自己同一性を保ち続けるヒンドゥー・ジャワ教的なもの、そしてジャワ及びバリの音楽文化の民俗伝統的基層が具体的に明らかにされる。特にその上演とそれに伴う音楽の分析は、部外者が扱うことが極めて困難な分野である。

評価すべき第3の点は、本研究が、音楽学も民族音楽学も未だ確立されていないインドネシアにおいて、インドネシア人自身の手によって遂行された最初の貴重な民族音楽学的研究であるところにある。従来、インドネシアの音楽文化は主として外国の研究者によって調査研究されてきた。今日、インドネシア人自身の内からの目でインドネシアの音楽を研究することが期待されている。本研究はそのような要望に答える最初の力作であるという良いであろう。勿論その内容については各方面から批判されなければなら

ないので、英語で記述されている。またインドネシアの若い研究者への便宜を考えてインドネシア語による内容の要旨も用意されている。

評価すべき第4の点は、従来の外国人によるインドネシア研究をインドネシア人の立場から批判的に吟味し、容認できる点とできない点を明確に指摘していることである。外からの目では見落としがちな、あるいは誤解しがちな文化の側面を内部者が明らかにすることによって、外国人の研究が正確になるばかりか、比較文化学上の新たな視点が生まれてくる可能性を秘めている。

以上、本論文の優れた点を列挙したが、その一方で本論文には若干の問題点も認められる。「ジャワ及びバリの音楽理解の鍵としての民俗伝統」をめぐる情報は極めて豊富ではあるが、その論議がしばしば堂々めぐりをして論旨がスムーズに展開しない。その結果、明快な結論が提示されない。また、第4部「結論」では話題がやや散漫となり、最後に結論の結論に代えて75の仮説を置くにいたってはいささか冗長の感がある。しかし論述が堂々めぐりするところは、西洋的発想からすれば、論理の破綻と思われるかもしれないが、絶えず同じ話題に戻りながら、そのテーマを増殖しつつ重ねていく方法は、ガムランの円環的楽曲構造にも共通する中部ジャワ人独特の思考法として評価されなければならない。巻末の用語解説は確かに有益ではあるが、その選択の基準が必ずしも明確でない。専門用語として取り上げて欲しいものはまだ他にも多くあるように思われる。しかしながら、これらの点は、今後、別な形で継続発展されるべき問題であり、極めて密度の高い本論文の価値を損なうものではない。

以上のように、本論文はインドネシア人自身によるインドネシアの民族音楽学的研究として従来の研究の水準をはるかに越える優れた論考であり、文学博士（論文）の学位申請論文として十分の価値を有するものと認定する。